不定期刊行　　第 473 号　　2012.11.21

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者　大西　浩
池田工業高等学校

風雪の「金峰山」

11 月 16、17 の両日、来年度の県大会の会場である金峰山に登った。テスト最終日の 16 日（金）、学校を出発したのは午後 3 時半。天気予報では明日は雨と言われている中、今日は一片の雲もないピーカンである。一日ずれて今日登っていればさぞやとは思えど、こればかりは仕方ない。廻り目平の駐車場に着いたのは、6 時過ぎ。すでに真っ暗なキャンプ場の満天の星の下に幕営し、早速作ったキムチ鍋に舌鼓。

翌日は 4 時起床。朝から風は強かったが、星が出ている。恐らく天気は崩れるだろうが、樹林帯の中は問題なかろう。テントを撤収し、ボツボツ明るくなり出した 5 時 50 分にテン場を出発した。来年度の県大会のコースを想定し、時計回りに金峰山を目指す。テン場あたりも先週一度雪がきたのだろう、日陰には僅かに雪が残っていた。朝起きたときは、星も見えていたのだが、この時間になると上の方から厚い雲に覆われ始めた。

7 時、八丁平との分岐。ここからの登山道はかつての 1／25000 地形図では、誤って記載されていた。すなわち地形図上には西股沢をしばらく遡上した後、実際に登山道の通っている尾根より 1 本東の尾根を通るように引かれていたのだが、最新の電子国土ではそれが訂正されて、実際の登山道通りに引かれるようになった。つまり、西股沢と砂洗沢の間の沢を遡上した後、左岸から尾根に登って 2302mのマイナーピークを巻くような形で金峰山小屋へと登っていく実際の道が地形図上にも表現されたということだ。1998 年に金峰山で県大会を行ったとき、僕は県の専門委員長をしており、下見をしている中でこの誤りに気づいたのだが、紙ベースではその数年後の改定でも直っていなかった。今回の山行では、電子国土を印刷した地図を生徒にも持たせていたのだが、確認もしないままかつての通り、道は誤ったままになっていると思い込んでいた。僕自身はザックの中に古い 1／25000 地形図の原図を持ち、ＧＰＳにも古いままの地形図を取り込んでいたがそれらは見ずに、実際手元には生徒と同じ電子国土を持って歩いていた。道が直されているとはつゆ知らずに。

具体的にどこがどう違っているのかはうろ覚えだったが、とにかく地形図と実際の地形が違っていると言うことだけが頭にインプットされていてので、八丁平の分岐では、偉そうに生徒に「ここからは地図と道が違っているから、しっかり地形を見て歩くように」と言っておいたのだが、歩き始めてすぐに気づいた。おかしい、手持ちの地形図と登山道があっている・・・。改めて 1／25000 の紙地形図と電子国土を見比べて納得。

8:15 尾根上の 2250m地点で一本取る。あたりは雪が数センチ積もり、冬山の景色になった。天候も悪化の兆しをみせ、チラチラと小雪が舞い始めた。今シーズン初めての雪上歩行をしながら、9:00 金峰山小屋着。森林限界となっているここから頂上方面に少し足を踏み出すと、猛烈な風雪が吹き荒れていた。このままでは急速に体温が奪われると判断したので、休憩代を払って暫し小屋で休ませてもらうことにした。湯を沸かし、あたたかい物を生徒に飲ませた。多分、この先は雪が氷化しているので生徒たちの歩行技術ではアイゼンも必要だろうし、何よりからだが慣れていない今、低体温症も危惧さ

れた。予定していたコースは頂上から大日岩経由で小川山へ回り、唐沢の滝を経由して廻り目平へ下るという長丁場。このまま頂上に登らずにトラバースして大日岩側の稜線に出ることも考えたが、風と雪の勢いが今後ますます強くなることが十分予測できたので、今回はここまでで引き返すこととした。

撤退。下るにつれ、天気はどんどん悪くなり、12:00 にテント場に着く直前には大雨となった。上部稜線は強風が吹き荒れ、雪が激しくなっていたことだろう。そんなわけで県大会のコースを精査することはできなかったけれど、生徒には悪天への対処を身をもって体験させることのできるいい機会となった。

ちなみに後日談がある。学校へ帰って、管理職に、「樹林帯から上は猛烈な吹雪。一年生でまだ山に慣れていない生徒も多かったので金峰山小屋で休憩料を払って、低体温症に備えた。」と話したところ、「先生それは大変でしたね。なんとかしましょう。」と旅費で教員分の休憩代を手当してくれるとのこと。生徒の分についてもクラブ奨励費から支出してくれるとの鶴の一声。旅費については先日のかわらばんでも書いた通り、「規程」を振り回してなかなか例外を認めてもらえない中、たかだか 200 円というわずかな額だが、活動の特殊性を理解してのこのような措置を講じてくれたことはありがたかった。本校の校長は私が山岳部関連の活動をすることに関してだけは、「まあ、大西が言うんじゃ仕方ない。」と思っているのか、かなり理解を示してくれている。今回の山小屋休憩料は、全く期待もしていなかったのだが、日頃から安全登山を心がけ、それなりに活動している部分を評価してもらっていると思うと嬉しかった。

山の文化 IN NAGANO

11 月 17、18 日はかねて紹介していた「山の文化 IN　NAGANO」という講演会が大町の山岳総合センターで開かれた。日本山岳文化学会と日本ヒマラヤ協会の地方講演会に開催地域の山岳団体である長山協も加わって行うというスタイルのもので、毎年地方を回って行われ今年が 7 回目（長野では 2005 年の第 1 回以来 2 回目）とのことである。

僕は生徒と金峰山に行っていたため、「ユープル木崎湖」で行われた夜の懇親会からの参加となった。初日の講演も学術的でかなり内容の深いものであったと参加者からは好意的な感想が多く寄せられた。宿泊場所である山岳総合センターに移ってからも 2 次会が延々と続き、とどまるところのない山談義に花が咲いた。東京からの遠来の参加者など普段はなかなか接する機会のない方々と話ができたのも意義あることであった。

2 日目の講演は、信大教授泉山茂之さんの「ニホンジカはなぜアルプスの高山帯をめざすのか」、山岳ジャーナリスト菊地俊朗さんの「明治・大正・昭和前期の新聞に見る信州登山界」、日本ヒマラヤ協会会長山森欣一さんの「日本ヒマラヤ登山通史のまとめ」の 3 本。南アの 3000m の稜線まで入り込んだニホンジカが、ついに北アルプスにも出現したとの報告があったが、高山環境を守るために我々がしなければいけないことは、ニホンジカに生息するのによい環境があることを覚えられないことだとのこと。また菊地さんは、日本登山史を日本登山界の常識というフィルターを外した目で見てみると、違ったとらえ方ができることを教えてくれるきわめて示唆に富んだ興味深い内容の話だった。最後の山森さんは知る人ぞ知る日本ヒマラヤ登山の研究の第一人者。氏のライフワークでもある「日本人のヒマラヤ登山研究」にあたっての考え方が披瀝されたが、ときには毒舌またときにはユーモアを交えながら、こちらも大変におもしろい話だった。